

大学・企業の人材育成共通キーワードは「思考力」と「判断力」

2019年4月22日、経団連から「学修成果」を考えるにあたって、注目したい提言がなされました。「採用と大学教育の未来に関する産学協議会中間とりまとめと共同提言」です。この中で、「Society5.0時代に求められる人材と大学教育」が発表されています【図表1】。経済界と大学が、人材育成の共通言語を作ろうと対話し、共同提言がなされたことは、画期的なことです。

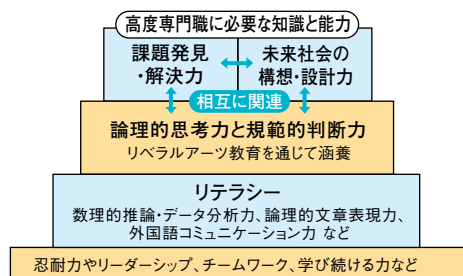
この共同宣言を読み解く上でのポイントは2つあります。1つ目は、忍耐力やリーダーシップといったコンピテンシーよりも、論理的思考力・規範的判断力、課題発見・解決力等の能力・リテラシーが中心に据えられている点です。今回、大学教育でこそ育まれている思考力や判断力が注目されたことは、大学にとって大きな意味を持ちます。

2つ目は、専門教育を通じて育まれる能力、リベラルアーツ教育が中心に置かれた点です。専門的知識・スキルは卒業後、アップデートすることが求められますが、学び続けるために必要な専門教育のベースとなる能力の重要性が高まったと言えます。つまり、大学教育における学問的なアプローチによって育んできた汎用的能力そのものが、Society5.0時代に求められる人材であると定義されたのです。

大学の学修成果は、大きくは「学位プログラム単位で保証すべき力」と、「大学全体で保証すべき力」の2つに分けられます【図表2】。今回の共同提言で求められる人材像は、まさに大学全体で保証すべき力、汎用的スキルと一致しています。学修成果の可視化が進んでいるアメリカでは、CLA*という標準テストを利用し、批判的思考力、問題解決力、分析推理力、文章表現力を学修成果として評価しています。「大学は就職予備校ではない」という声を伺うことがありますが、大学全体で保証すべき力、思考力や判断力など

【図表1】 Society5.0時代に求められる人材と大学教育

論理的思考力と規範的判断力をベースに社会システムを構想する力を備えた人材



(株)ベネッセキャリア
教育事業本部
大学営業部部長

風間直樹

かざまなおき ●入社以来、高校・大学の教育改革支援を担当。近年は、学修成果の可視化や高大接続に関する大学向け講演会、勉強会を多数実施。



学ぶと働くをつなぐ学修成果とは？ 大社接続の視点から見ると可視化

の学修成果が可視化されていけば、今後このような話は消えていくのではないのでしょうか。

学修成果の信頼性が企業の採用を変え学修者の進路実現につながる

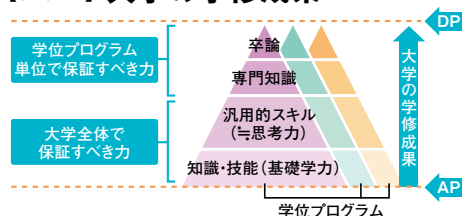
一方で学修成果の可視化を進めるにあたっては、企業側の課題もあります。【図表1】で示されたような人材像の能力を、新卒採用でどのように評価するのか、という点です。

弊社で行っている「採用基準」に関する研究結果では、実際企業は採用時に、面接官からの質問に対する学生の「即応力」を重視する傾向があるようです。大学で面接の練習など、いわゆる就活対策が盛んに行われるゆえんです。また、企業側からすると、大学教育で培われる「熟考力」を評価すること自体が難しいなどの意見もあります。

そんな中、2019年3月に日本私立大学連盟から、「大学がポートフォリオ等を活用して学修成果を可視化し、それを企業が新卒採用で評価すること」(「新たな時代の就職・採用のあり方と大学教育」)という提言がなされました。大学、企業双方でこれが進めば、学生の就活=3年生での就活対策ではなくなります。学生は大学入学後の経験や学びの蓄積、修得した能力やスキルを証明することを通じて自分に合う企業を見つけやすくなります。つまり、大学での教育成果が正しく評価されるようになるのです。

このように学修成果の信頼性を高めるための取り組みは、自学の教学マネジメントはもとより、学修者自身の学びの質・意欲を高め、彼らの進路実現のためにも不可欠と言えるのではないのでしょうか。

【図表2】 大学の学修成果



*アメリカのCouncil for Aid to EducationによるCollegiate Learning Assessment